

学生・生徒の海外旅行の際において事前に 指導すべき事柄について

異文化間教育の視点から

檜 本 英 彦

現在、多くの大学や学校において、学生、生徒の海外旅行が盛んになっている。そのあるものは個人旅行であるが、また、大学、学校などが主催、または関与する団体旅行、研修旅行である。前者の場合にも必要であろうが、特に後者の場合において、個人また、集団として、どのようなアドバイスを与えることが必要であろうか。

例えば語学研修に関して、その学習自体に関するいろんな指導がなされるのは当然であり、また訪れる国に関しての社会的、歴史的な知識の指導も欠くことはできない。海外からの電話の掛け方、保険の加入方などの実際的な事柄も重要である。しかし、ここでは、彼らが外国という全く異なった環境をよく理解し、個人としても、また集団としても適切に適応し、世界に通じる良き市民として、好感を持って迎え入れられ、同時にこの外国体験が、自己啓発にもつながるという見地から考えて見たい。

諸外国の国民の国民性や、思考様式、行動様式が我が国民とは違う点をよく理解していることが、その国でのスムーズな適応を助けるであろう。それはどちらの行動様式が良いか、という問題ではなく、単に違いを理解していることが、誤解や摩擦を少なくするのである。

また、現在の我が国の若者がやや社会的常識に欠け、その行動様式がそのままでは外国では通用しない場合があり、外部に対しても彼ら自身にとっても各種のトラブルを生み出す可能性がある。

子供時代に、一定の基準で躰を与え、将来社会に出て一人立ちした場合に、自律的に行動できるように準備をほどこす、というのが欧米の子供に対する訓育の基礎的な考え方である。我が国でも、この点は変わりはないであろうが、外来の思想である自由と民主主義といった思想が十分に消化されず、また、社会のルールは自分たち「市民」が自分たちで作ったものだ、という考え方が希薄である。そしてその基準も明確に定まらず迷っているのが我が国の現状ではないだろうか。

また自由である自己を大切にし、同時に隣人と協調して、社会のルールに従って円滑な社会生活を営もうとするのが欧米の基本的な考え方であろう。各自が自立した個人であるから、各自が自律的に判断をし、自分の責任において行動するのである。

我が国では自立心と自律性が育たないまま、行動の決定を集団に委ねるという考え方がある一方、自由とはこのような集団の干渉を受けないことであり、自由とは無制約のことだという

梶 本 英 彦

考えが存在している。この二つの考えの間に個人も教育も揺れているのではないだろうか。

しかし若者は一旦社会に出れば、社会のルールに従わざるを得ず、また社会も、それを要求するので、若者に対し一定の行動の基準を定め、教えなければならない。このようにして、多くのことにおいて、行動の仕方がいわゆるマニュアル化する結果となる。しかし個人の心はそれでは未解決で、対社会ばかりではなく、自己の真の自由と、社会の規律に自主的に従うという問題は解決されないままである。

それで単独の個人となった場合、自分の知識や能力、経験を基にして、自分の置かれて状況を把握し判断して、自己の行動を決定するということが不得手になってくる。

古来我が国民は、自己の属する集団（これは時と場合によって変化する）とそれ以外との間に一線を画し、自己の属する集団以外の人に対して個人としてスムーズな対応をするのは必ずしも得意ではない。現代の我が国の若者もこの傾向を強く持つばかりでなく、学校や社会といった帰属集団に従うことは否定して、狭い少数の友人の集団の中に、外部との関係の希薄な「自由」を見いだそうとする。

従って、考えや意思の決定もその集団の中だけの相互依存関係に頼ろうとする傾向が強い。これは社会的に見ると、ルールに対する反抗、外部の人達への無関心、無配慮といった形で表れてくる。このままの発想とそこからくる行動様式を持って外国に出かけると、彼等はしばしば傍若無人といった印象を与えることとなる。しかし彼等は決して悪意や敵意からこのような行動を行っているわけではなく、単に自己と自己の集団以外に対して無関心であり、行動の仕方を知らない結果に他ならない。

若者に寛容な我が国とは違い、諸外国においては、これらの傾向はそれ相応の評価を受けるであろう。また個人として行動する場合には、行動の基準が自分で発見できず、周囲の人々との間にギャップや摩擦の可能性を感じて、行動が消極的になる原因ともなるであろう。

しかしこれらの傾向を自覚し、外国人の行動様式とその背後にある個人と社会との関係をよく理解し観察し、それに即応して行動する機会を持つことは、それだけでも有意義な学習である。指導者が異文化の本質的な事柄を理解しながら事前にこれらのことに関し説明を与えるならば、これは、海外での実際の体験と相まって学生の視野を広め、寛容の精神を養い、人間的成長の一助となるのではないだろうか。

なお、この論文で、～すべきである、といった表現は、「～するように学生、生徒に注意を与えたらよい」という風に読み替えていただきたい。

また、この論文では主として欧米への旅行を対象にしているが、これは筆者の経験不足で、自信を持って述べられる地域が限られているからである。

1. パスポートと、出入国の問題

パスポートは日本人としての身分の保証の裏付けとなり、外国でも個人として正当な扱いを

受けることができる保証である。Visa は言わば入国許可証のようなものであるが、3ヶ月以内の観光旅行に関しては、多くの国と相互に省略の取り決めがある。

外国への入国の際には、入国管理官の前で、一人一人審査を受ける場合があり、その応答の仕方を事前に教えておく必要がある。ほとんどの場合、観光 (Sightseeing 又は On holiday) と答えればよい。もし研修、留学と答えれば、その受け入れ機関関係の書類の提示を求められるであろう。

若者のうちには外国では自由に働いてお金を得ることができるのだ、といった誤った考えを持っている人がいる。しかし観光で入国した外国人が国内で労働することを許している国はなく、我が国へ観光目的で入国する外国人も厳重にこの点で審査を受けている事実を我々は経験として知らないだけである。また、このことによって自国民の就職の機会が守られているのだという事実にも留意したいものである。

従って、入国の際に、帰りの航空券の提示を求められることがあるのは、近々帰国の事実を示すためである。また所持しているお金の額を質問され、時にはそれを提示することが求められることがある。その額が滞在機関の割りに少ないと、その期間の生活費をどうするのかと追求されることがある。

日本の若者は、諸外国の若者が所持している金額を遥かに上回るお金を持っていることがよくあり、この点が誤解を生む可能性もある。常識以上の金額は、例えばそれが不法な活動の資金である可能性を疑われるのである。

ともかく、上記の件は、出入国の常識を教えるだけでなく、独立国が外国人の入国をどのように扱うのかということをおぼろげに学ぶ機会となろう。ただし、我が国と数ヶ国との間で行われているワーキングホリデーの制度について知る必要があり、これと上記のこととの異同関係をよく理解する必要がある。

2. 名前や住所を書くことと署名について

ア. 外国旅行に関して書類を書くことを求められることがある。この際、自分の名前、住所などをローマ字で書かなければならない。金沢を Kanazawa、山を Yama と書くことは「英語で」書くのではなく、また俗に使われるように「英字で」書くのでもない。ヨーロッパのほとんどの言語が書かれるのは古代ローマから派生した文字によってであり、これは「ローマ字」または「ローマ文字」、または「ラテン文字」である。

日本語もこの文字で書かなければならない場合があり、それは「ローマ字で書く」のであって、「英語で」書くのではない。フランス語も、ドイツ語もこの文字で書くから、「英字で」というのも不合理である。また、アルファベットというのはある言語を書く文字の体系のことであって、ギリシャ文字のアルファベット、ロシア文字のアルファベットなどもあるから、「アルファベットで書く」というのも矛盾している。

この日本語のローマ字書きには第1表と、第2表の2式があるが、これを混用しないように

樫 本 英 彦

注意しないとイケない。また太田さんが、Oota, Ota, Ohta など時によって違った書き方をすると、別人と見做されて困った状況に陥るといふこともありうる。また長音も正しく書かないと、「毛利」と「森」の区別がつかなくなる。

日本の住所には、カタカナが地番の表記に併用されているものがある。この場合ローマ字で表記する際に、このカタカナを不用意にそのまま用いてはならない。i-56, ro-30 のように書かないといけない。さもないと、イはIと、ロはOと、カはbと間違っ受取られ、それを書いた手紙を処理する日本の郵便局員を混乱させるであろう。同様に日本だけの記号〒をローマ字書きの住所に用いてはならない。

イ. 我が国では印鑑が用いられているので、署名(名詞は signature、動詞は sign)ということが十分に理解されていない。署名は印鑑と等しく、個人の責任を示すためのものであって、代理の署名は容易に見破られるのである。しかし署名にはなるべく他人が偽書できない筆跡のものを工夫しているがよく、従って「その人独自の書体で書く。そのためちょっと読めないことがあるが、それでもかまわない。しかし、いつも一定の書体でないといけない」といった条件を備えている。自分の署名を他人に代わりに書いてもらおうと、いざという時に、法的な主張ができなくなるであろう。

また、外国でも漢字の署名で十分に通用するが、漢字と、ローマ字の両方の署名ができるようにしておいたほうがよい。

文書の指定欄に氏名、住所などをペンで書く際には、筆記体ではなく、活字体、言わば楷書で書くべきである。我が国では、文書を筆記体で記入したり、署名はきれいに楷書体で書かなければならないと考えられていることが多い。また、我が国の官公庁の文書には、「署名」と書かれている欄が、欧米式の責任を示す署名をするのか、単に名前を記載するのか不明であることがある。欧米では Signature は諸事項の記載の後で、記載者の責任を示すためのものである。

なお、有名人に名前を書いてもらおうといった場合の「署名」は英語では Autograph である。

ウ. また、公の文書を鉛筆で書くというのも若者が時として犯す誤りである。

3. 安全に対する配慮について

日本人が外国人から者を奪う、ということはほとんど考えられない。しかし、諸外国において、日本人はある種の悪質な人間から狙われる良い標的になっている。これは日本人が通常多額のお金、特に現金を持っている、ということが知られているからである。さらに日本人が安全に対して比較的無関心で、それが外部にはっきりと読み取れるからである。これは我が国が比較的安全であるため、安全を当然のことと考える他に、集団になると、日本人の関心は、その集団内部の関係に向けられて、外部に対しての注意がおろそかになりやすい傾向がある点にも関係している。

「欧米の都市は危険だ」という断定ではなく、「危険の可能性があり、かつ、それは我が国に

おける場合よりも多い。そして、起こるかも知れない可能性についてはいつも配慮している」という考え方でありたい。周囲の状況に即して自分で判断して対応する必要があるが、人口が数百万の大都市と、5～6万人の都市や、田舎の小さな町や村では事情が自ずから異なっているなどの事情も考慮すべきである。

ア．未知の人が話しかけてきた場合は特に注意が必要である。ある人が単に親しみを持って話しかけてくる場合もあるのは勿論である。しかし悪い意図を持って話しかけてくる場合も最初は親切を装っているのが普通であるが、経験の少ない若者にはこの区別の判断は難しい。

特に日本語で話かけられてくると、ふっと親密感が湧き、安心してしまうことが多いことに留意する必要がある。そして眠りを催すような食べ物が提供されたり、最終的には「案内して上げよう」という申し出となり、それを受け入れたための悲劇的な結果が時々報道されている。

相手がどのような人であるかということや、周囲の環境（例えば機内、田舎の村など）も考慮に入れて判断しなければならない。相手に敬意を持ってそれ相応の対応をしなければならないのは当然であるが、自主的に判断し、いざとなったら No と言える立場を常に保っていなければならない。

欧米の大都市には、生活の当てがなくなつて、貧困な状態にある日本人が生活しているという事実も知っているべきであろう。

必要があれば、はっきり No, thank you. と言って断ることをためらってはならないし、場合によっては、全く相手を見捨てるのがよい。特にこちらが複数である場合にも危険の可能性のあることに留意しなければならない。グループ内の誰かが同意を促すと、他の人はそれに従ってしまうことも起こり得る。また、こちらが多数だという安心感も作用するかも知れない。

イ．日本人は断ることが下手だと言われている。むしろ、断ることを恐れていると言ったほうが適切であろう。それで結局 Yes とも No とも受け取れる表現をしてしまうのではないだろうか。「断る必要のある時は明確に断らないといけない」と筆者が説明した所「断ると何か具合の悪いことが起こりはしないか」という質問を数度受けたことがある。これは日本人が、断ることを対人関係を悪化させる「何か悪いこと」と考えていることの証拠である。

遠慮深さから「せっかく他の人が自分のために決めてくれたことは尊重して、それに従わないといけない」という無意識の心理が働くためと思われる。そして不決断と、対人配慮からあいまいな笑いを浮かべる傾向があるが、この笑いは欧米人からは「同意のしるし」と受け取られやすい。

人を冷静に判断するという心の習慣がない上に、「外人」と言われる人たち、つまり欧米の白人は、皆すぐれた良い人たちだ、という先入観が働く場合もあると思われる。

欧米の「個人主義」とは我がままのことではなく、「自分が自分の主人である。自分のことを決定して、良くても悪くても、その結果を引き受けるのは自分である」といった考え方である。意思が明確に示されればそれを尊重するのが欧米人である。あいまいで二重の意味に Yes とも No ともとれる表現をすると相手はまだ脈があると思って、しつこく迫って来てますます No

榎 本 英 彦

と言いにくくなって来る。しかし明確に No と表明したのに、まだしつこく要求してくるとすれば、それは暴力であって、警察の存在している文明国の社会では起こりえないことである。

ウ. 日本人のパスポートが狙われやすい、という事実がある。これは高価に取引され、偽造に利用されるからである。また、日本人には現金でないとお金でないという考えを持っている人が今でも多く、そのことが今では世界的に知れ渡って、日本人の鞆や懐を狙うのは楽な商売だと言った考えが一部の悪い外国人にあるということも忘れてはならない。

エ. お金の所持にはトラベラーズチェックが安全であるという考えは今ではかなりゆき渡っているようである。しかし、我が国の若い女性が、いきなり小売り店へ入って買物をして、高額のトラベラーズチェックで支払いをして、換金を兼ねようとするのを目撃したことがある。これは、換金の場所についての知識がないためであろうか。外国では、どこでもトラベラーズチェックで買物ができるといふ、誤った知識によるのかも知れない。

トラベラーズチェックの換金は銀行がよいが、チェックの発行所によっては受け付けてもらえないところがある。また、国によって換金の場所がいろいろ違ったりするが、換金は自己の出費の計画によって合理的に行うことが必要である。無計画のまま、困った状況に陥らないようにしたい。我が国では考えられないことであるが、国際列車の発着する駅では、原則として終日の換金が可能である。

オ. レストランなどで、一人の場合、鞆を椅子に置いたままトイレに立つといったことはしない。この様な場合の紛失に対して店は責任を負ってくれないし、その旨が、壁に張り紙で掲示されていることもある。

店で、床やカウンターの上にバックなどを置いたまま、品物を見ながら自分だけが移動するということがあるが、これも危険である。リュックサックで肩掛けの細いものは後ろからこれをはさみで切られ持ち逃げされることがある。日本では、特に女性が公共の場で財布をテーブルの上に置いたままにしているのをよく見かけるが、これは我が国の安全の証かも知れない。しかし外国ではやってはならないことである。

カ. ホテルではノックがあっても誰であるか確認しないでドアを開けてはならない、ということは何れでも知っている事柄であろう。案内のポーターが帰ったすぐ直後のドアのノックにも注意する必要がある。ポーターが何か言い忘れて戻ってきたのではないかと考える、一種の盲点の時間だからである。

ホテル関係でどうしても部屋へ入りたいという人が来たら、鍵を開ける前に、フロントへ電話で確かめる必要がある。なお「フロント」は和製英語で、英語では Front desk、または Reception である。

女性が一人の場合、ルームサービスを依頼するのは危険を伴う場合がある。

キ. 都市を歩く場合は、自分のいる場所の確認法を知っていなければならない。欧米の道路には全て名前が付けられていて、その名前は通りの角の建物の壁に書かれているのが原則である。また番地に当たる家屋番号は、片側に偶数、他の側に奇数の番号が順に付けられ、各々の

建物の前に大きく表示されている。

しばしば不完全な地図を持って行動している人があるが、我が国の案内書の地図は大まかで、あいまいなものが多い。正確な地図は現地では容易に手に入るはずである。

都市には危険な地帯が存在している場合がある。引率者、土地の人のアドバイスに従って、そのような地区に足を踏み入れたり、そこを通過する交通機関を利用することは避けるようにしたい。また、貧しい人たちが多く住んでいる地区で写真を撮ることは慎まなければならない。

女性が道に迷った場合、道を聞くのは警官、または中年以上の、その土地の人と思われる女性が適当である。

ク. いざという時に助けを求められないような人通りの少ない所へは行かない。もし危険だと思われたときは、すくんだりしないで、日本語でよいから大声を出す。

ケ. タクシーは法定のタクシー待ち場所（都市の一定の場所にある Taxi stand、駅前、ホテルの前など）に駐車していて、規定の番号を掲げているものは安心である。客引きをするタクシーは無視しなければならない。また、並んでいるタクシーに乗る時は列の先頭の車に注文する。

コ. 帰国時に空港で見知らぬ人から「荷物が多すぎて困るので、これを持って行って欲しくないか。税関を出た所で渡して欲しい」と頼まれる例が報告されている。これは勿論、違法な物を持ち込む手口の一つである。頼まれる対象は、世間をあまり知らない純情な若い女性であることが多い。この際、税関にその違法な品物を発見されると、事実が立証されない限り、通関の際それを所持していた人が罪に問われるのだという。

サ. とまかく自分の安全は自分で守るべきもので、自分の不注意からくる事柄に関して、団体の引率者や指導者に責任を期待してはならない。

シ. 年鑑などに記載されている各国の犯罪の統計を見せることは、危険を実感的に知らせるのに役立つかも知れない。また、外国ではスリなどが出稼ぎ的に、観光シーズンに有名観光地へ「仕事をしに」集まることがあるという事実も知っていたほうがよい。

4. 言語の使用と、意思の表現について

学生、生徒の海外団体旅行は語学（英語）研修である場合が多い。英語の学習に対する考え方についてはこの論文では直接的な主題ではないので省略したい。しかし、日頃からの英語の学習にも関係し、英語による表現に関して次の点に留意したい。

ア. 上記3でも述べた様に我が国では意思の決定、表現が必ずしも明確ではなく、不明確なまま、または必要な部分を省略したままの表現が多い。英語を欧米人とじかに使用する場合は、この考え方では通用しない。まず、臆することなく自分で自分の意思を決定し、それを相手に伝える努力をしなければならない。この際の表現は「必要にして、十分な」ということを第一義としたい。

ある選択をしなければならない時、即座に状況を判断し、自分で意思を決め、それをできる

榎 本 英 彦

だけ正確に相手に伝えようと努力するのが欧米人で、語学の研修もこのような見地から行いたい。もし言語力が不足であるならば、紙に書いてでも自分の考えを明確に伝えようとする意思が必要である。すぐ隣の友人の顔を見て決定の助けを求めるのは大人として恥ずかしい行為である。

イ. 例えば飲み物に対して「コーヒーですか、紅茶ですか」と尋ねられたら、「どちらでもよい」というあいまいな答えはあまり歓迎されないであろう。また欧米では言葉はその意味通りに受け取られるものと考えなければならない。我が国を訪れる外国人が「飲み物はどうですか」と尋ねられ、いらない、と答えたのに、やはりコーヒーを出された」と経験談として語ったり、書いたりしていることがある。しかし欧米では「この人は遠慮して断っているのだから、やはり提供してあげなければならないだろう」といった、他者の考えを一方向的に Guess する考え方はない。また、遠慮して頷きながら No, thank you. というと、相手はその意味を理解しかね、頷きを Yes の意味ととる可能性がある。

ウ. また、言語には「時と場合」ということがあることに留意して語学を習得したいものである。俗語を含んだ学生語といったものがあるが、これが社会の全てに通用するわけではない。言語は時と場合で使い分けられるものであることは、日本語も英語も同様であって、ぞんざいな表現を「生きた英語」と勘違いしないようにしたい。例えば、若い人が初対面の年長者に対して、馴れ馴れしく、ぞんざいな挨拶や表現は用いないようにしたい。

英語には敬語がない、という発想に基づいて、日本語から敬語表現を取り去って表現すると、依頼の表現などは直接的になってしまって、相手に不快感を与えることがあるという。相手の意思を尊重した、「思いやり表現」とも言うべきものを理解する必要があるだろう。

5. 宗教に対する態度について

欧米の教会は信仰の対象ではあるが、同時に、その歴史的価値から、観光の対象でもあって、有名な教会や大聖堂を訪れる人達が多い。これらの人達は一旦教会の中に入るとできるだけ足音を立てないようにして歩き、会話は自制し、話す場合は囁き声のような低い声である。

中では椅子に座って祈りを捧げている姿も見られる。彼等の全てがキリスト教信者だとは考えられないが、一旦教会に足を踏み入ると全ての人が畏敬の念を持って行動する。

我が国では一人が二重の宗教をもっていると言われるように、宗教に対する態度が欧米のそれとは大変異なっているように思われる。

このことが関係してか我が国では宗教が人間の魂に関係して厳粛なものだ、との理解がやや欠けている面が見られる。筆者はかつてオーストラリアのメルボルンにあるカトリック大聖堂である St. Patrick's Cathedral を訪れたことがある。その時入口のドアに大きな注意書きが貼られているのを見た。それには「教会の中では帽子を脱ぎ、騒がないで、静粛にしてください」と言った旨の言葉が日本語で大きく書かれていた。メルボルンには欧米からの旅行者の他、アジア諸国からの旅行者が多いが、他の言語の注意書きは見あたらなかった。

数年前パチカンのサンピエトロ大聖堂である種のことが禁止されるようになった。これに対する表向きの理由は公表されたが、実際は我が国の若い女性たちが堂内で大変賑やかだからとのことである。像の前で大勢で写真を撮りあったり、少し離れた所にいる仲間に呼びかけたり、小走りに走ったりすることは厳につつまなければならない。

欧米の教会では礼拝が行われている際には、一般の入堂を断る所がある。また、礼拝中も一般者の見学を許している所もあるが、このことが可能なのは、一般の見学者達が、その際に、礼拝の邪魔にならないように、足音をしのばせ、会話も自粛して行動するからである。

イスラム教、ヒンズー教のように日本人があまり良く知らない宗教も世界には多い。このような宗教に対しては、同じように尊敬の気持ちで接し、またその宗教のやり方を尊重する心の用意がなければならない。

もし訪れる学生、生徒がキリスト教信者であるならば、教会の礼拝に参加できるのはもちろんで、その教会からは歓迎されるであろう。ただし、聖餐に与れるのはその教派に属するか、相互陪餐の関係がある教派に属する者だけである。この場合証明書のような物は不要であるが、あくまでも個人の良心の問題であるから、単に興味本位から聖餐に与ろうとするものは自己の魂を欺くことになる。

6. 社会道徳と、対人距離という問題について

二人の人が相対した場合どの程度の物理的な距離を置いて接するか、ということは興味のある問題で、これは民族によっても異なるということが実証されている。これと関連して、親しい人や、未知の人に対してどの程度の心理的な距離を保ちながら接するか、という問題がある。

日本人は一般に、この心理的対人距離の取り方が不得手であると言われている。未知の他人にはほとんど無限の距離があるかのように関係を持とうとしないが、一旦何かのきっかけで近づきができると、不必要に近づきすぎる傾向があり、すぐに年齢や、職業、家族関係などのような個人的な事柄について質問する傾向があるが、これはそれによって親近感の裏づけを得たいからであろう。

欧米人が仮に観光地で隣り合って座ったとしよう。彼等は上手に会話を交わし、最後は微笑とともに軽い挨拶を交わして別れるであろう。日本人の場合（このような場合、日本人が複数である場合が多い）は果たしてこのようにあっさりしているであろうか。未知の人は自己の圏外に置こうとするが、一旦好意を持った場合、いきなり相手との親密な関係を持とうとする場合が多く、名前や住所の交換にまで進みたがる場合が多いのではないかと思われる。

日本人が欧米人と接する場合最も困難を感じるのは、この心理的対人距離の取り方の違いによって起こる困惑ではないかと思われる。外国人に接した場合、疎遠と親近感とのどちらを選び、またどの程度親密さを表したらよいかという判断がつかず、心理的に不安定になるのだと思われる。

従って、未知の人に対しても、知人に対すると同様の配慮をし、相応な礼儀というクッショ

檉 本 英 彦

ンを置いて対応するという欧米人のやり方を理解し、現地においてはそのように行動することが、不必要な摩擦や、不快を避けることとなる。

对人的、特に未知の人に対するマナーの欠如は、我が国でも好ましくないが、致し方なく許容されているものもある。しかし、これは欧米では通用しないものと考えなければならない。また、単に習慣の相違から現地では「エチケット違反」と考えられるものもある。「郷に入っては郷に従え」の考えが通用する分野である。

ア. Thank you. Sorry. Excuse me. などの表現が必要に応じてすぐに出るようでありたい。テーブルで自分に物が運ばれてきた場合、また、自分の持ち物、自分に関係したものが讃められた場合など、特に我々は Thank you. をいうのを忘れがちである。

Thank you. という場合や、握手などの挨拶の場合には相手の目を見ることが大切である。遠慮深さを表し、お辞儀をして目を伏せると、相手は、自分を嫌がって見ないようにした、と受け取ると言われている。

イ. スライド式の日本の戸と違うドアの開閉には我々は慣れていないようである。自分の後に続く人があれば、その人のためにドアを開けたまま支えて通してあげるようにしたい。まして他人が開けたドアを黙って先に通り過ぎるようなことはしてはならない。

ウ. 廊下や道を歩く時は、向こうから来る人を意識し、道を譲るのが我が国でも昔から当然のこととして行われてきたことに留意したい。またグループになった場合、場所をふさがないようにしなければならない。

エ. 他人のそば、耳許で仲間同志が大声で話しあったりしないようにしたい。

オ. 他人を身体や腕でかきわけて前へ出ようとしたり、先へ出て割り込んだりしない。

カ. 自分の持ち物が他人にぶつかる可能性に絶えず留意していきたい。特に体の向きを変えた時、背中のリュックサックが他人にぶつかるかも知れない、といった配慮は十分であろうか。

キ. 仲間の数人で話していたり、または一人である時でも、背後に人がいる可能性を考えなければならない。急に後ろに飛びさがつたりすると、他人にぶつかり、相手が高齢者であったりすると、怪我をさせ、刑事上の事件に発展しないとも限らない。

ク. 待ち順の列を守ることが大切である。カウンターでの支払などの列では先頭の人に対応を受けている時はその真後ろに立つべきである。とかく焦って、前の人の横へ出たり、二つの列の中間に立つという心理は、割り込まれるのを防ぎたいという心理からだろうか。

その他我が国では比較的なじみのない習慣としては、

ケ. After you. とは「どうぞお先に」という意味である。男性がそう言ったら女性はためらうことなく先へ進むべきである。遠慮し、ちゅうちょすると後続の人達に迷惑が及ぶであろう。

コ. エスカレーターでは片側に立つが、急いで上下する人達に通路を開けておくためである。

サ. 複数の窓口、女性トイレなどの順番につくのは、すべての人が一列に並び、開いた所へ列の先頭の人が進むというやり方があり、我が国でも大都市では実行されている所もある。

シ. 日本では女性が話したり、笑ったりする時に手のひらで口を覆うことは、奥床しいとき

れている。この点で日本人の特性を何ら恥じる必要はないが、欧米ではこの行為は、あまり好意的には受け取られないということを知っていても無駄にはならないであろう。

ス. 日本人は何かの恩義を受けた際、何度も感謝の言葉を述べ、翌日も、時にはかなり日数が経って再会したときも以前のことに対して感謝の言葉を述べることが多い。これに対し、欧米人はその当座一回だけ感謝の言葉を述べるのが原則である。そのため我々はこれを時として、相手の人はあまり、ありがたく思っていないのではないかと、不安に思うことがある。謝罪の表現も一回だけが原則と考えてよい。

これと同様に、別れの時も彼等は、一回か、二回の別れの挨拶で、極めてあっさりとは別れる。これに対し、我々は何か無視されているのではないかと、と言った思いを抱くことがあるが、欧米人のこの傾向を理解していれば、我々の不安も軽減されるのではないだろうか。一方、何度も何度も繰り返しお礼を言う我々の傾向も、彼等が理解している日本人の習性かも知れない。人との別れに際しても、なかなか別れられず、何度も挨拶し、挨拶がすむとまた話を始めるのも、我々が無意識に持っている傾向であろう。

民族的な差異もあるであろうが、別れに際しての感情の表現がどの程度であるかということ意識して留意すべきことであろう。外国人との関係では、我々は感情の表現や、対人距離と言う点で、やや混乱する傾向があるようである。しかし、それはその国の人達のやり方をよく観察し、同時に良識をもって行動すればよいのではないだろうか。

セ. 相手の、職業、家族、出身などを聞き出したいと思ひ、特に年齢、結婚しているかどうか、といった事柄をぜひ知りたいという殆ど無意識の傾向を我々は持っているようである。このようなことを知ることによって初めて我々は安心して自分との関係で相手を定位し、仲間として関係を持つことができるようになるのかも知れない。

また、太っている、痩せている、等相手の身体的な特徴、外国人の場合には髪の毛の色などを言及したがる傾向もある。

しかし、これは良く知られているように欧米人にはあまり歓迎されない質問である。アメリカ人に対し、その名前を聞いた日本人が、その名前からその人の祖先の出身地を問題にしたがるのも良くある傾向である。これは我々が、どこにその人が帰属しているかに関心を持ち、そのため出身地を問いたがる習性とも関連があるように思われる。

ソ. 我々が良く贈り物をしあうのは、この贈り物によってお互いのきづなを強く保ちたいと思うからに他ならない。欧米人の人間関係において、お互いのきづなを強め、保つものは会話、そして、親切な行いであって、贈り物のやりとりはさ程重要ではない。

日本人は、贈り物をしあうだけでなく、もらった贈り物に対して即座に返礼をしようとする傾向を持っている。もらった品物、受けた好意に対する返礼はどの国民でも大切だと考えるであろう。しかし彼等の返礼は必ずしも、即座であつたり、直接的であるとは限らず、風習としての「お返し」という考えは知られていない。また、彼等がAから受けた恩義は、必ずしも直接、即座にAに返すことはしなくとも、何らかの機会に別人のBに返すということが行われる

樫 本 英 彦

という。

ある人が、日本でいろいろな人から親切にされた。するとその人は、その国を訪れた日本人に親切を示すことで「返礼」をしようとするのである。隣人へ愛を示すことによって、神から受けている愛に報いるというキリスト教の考えに根幹があると思われる。

従って、欧米人に対しては贈り物、特に高価な贈り物によって人間関係を形作って行こうと考える必要はない。また金銭を送ることは失礼であるということも考慮に入れておく必要がある。

7. 期待される教養という問題について

高校生、大学生は英語の学習をしているのが当然であり、海外滞在の多くは英語の研修である場合が多い。それ相応の英語力を期待されるであろう。しかし、同時に年齢相応の知識が期待されるのである。

ア. 日本人が外国に滞在している際に、外国人との会話では、しばしば日本の現在の社会事情や、歴史、文化が話題となり、いろいろな質問を受けることがある。この際に、当の日本人学生からはしかるべき返答、説明が期待されるであろう。当人の英語力の問題もあろう。しかし英語の力はあるのに、自国の事情に関して当然期待される説明ができなければ、当人の教養が問われることとなる。この点現在の我が国の教育は十分に機能しているであろうか。

イ. 欧米においては、若い人は、あまりお金を持っていない、従って平素は質素な服を着ているのが当然である、というのが常識であり、若い人が、不相応な高価な衣服を着ていることは、不自然に見えるであろう。40代、50代の女性が着るような、ブランド物の衣服を着、持ち物を持つ必要はない。外国旅行においては、高価な衣服を禁止するという考えではなく、外国人の常識を伝え知らせて置くことも大切であろう。

ウ. 衣服には「時と場合」という関係があることも、外国の衣服においてはしばしばよく分からないままに無視されるということがあがる。従って、特殊な職業の人がするような服装、映画の貴婦人が特別の場合に着るような服装、そして若い学生が普段着る服装——これらを識別する常識を持っていないといけない。我が国では通用しても、洋服の本場である欧米で奇異と感ぜられるような服装はしない方がよい。

エ. 欧米人では言語の使用の仕方は教養を表すものだ、という考えが行き渡っているように思われる。我が国では、服装や持ち物には気が使われるけれども、言語の使用、特に発声方についてはしばしば無頓着である。我が国の幼い子供どもや若者は、ごく近くの人、目の前の相手に対しても叫ぶような物の言い方をすることが多い。

欧米では、相手に聞こえる程度の声で話す、というのが常識である。近くに他人がいるのに、そのすぐ耳もとで、仲間同志大声で叫ぶように話し合うのは非常識である。またレストランなどで少し離れた所にいる仲間に話しかけることは避けたいものである。

まして、最近我が国の若い女性に時に聞かれる、きゃー、という叫び声は絶対上げないよう

に指導する必要がある。この叫びは、仲間同志楽しくやっているという心理の一種の表現なのかも知れない。しかし、大人がこの様な叫びを上げることは欧米では非常識の限度を越えるものだという認識を持っていたほうがよい。

8. 食事のマナーについて

ナイフとフォークの使い方を中心とする洋食のマナーは現在ではよく知られるようになってるので、この点は省略したい。一般に日本人がテーブルでの洋食に困難を感じる一つの理由は、テーブルと自分の体の間隔が開き過ぎて、体や腕のバランスが取りにくいためである。テーブルと自分の身体とは10センチ以下の間隔が適当である。食事中口の音を立てないようにし、また食器の触れ合う音も最小限にとどめるように配慮しなければならないことはよく知られているが、これはナイフやフォークの使い方以上に基本的に重要な点である。

バイキングと称される立食形式の食事が一般的で、研修旅行などでは行われることがよくある。バイキングというのは日本だけ、または日本人に対してだけ用いられる言葉で、英語では Buffet で、発音は「バフェイ」または「ブフェイ」である。この食事において忘れられ易い点について考えてみたい。

ア. 皿に一度に沢山の食物を山盛りのようにとるのは避けるべきことである。一般のコースと同じ順で、前菜的なものから順次少しずつとり、食べ終わったらその都度次のコースをとりテーブルへ行く。

イ. 皿に食べ残すこと、つまり、食べ切れないほど一度にとるのは、自分は日頃十分に食物に恵まれていないと言っているようなものである。

ウ. テーブルにへばり付かない。大勢の場合には食事をとるためには列に付き、途中へ割り込まない。

エ. 参加者の多くとできるだけ話を交わしたい。その際一人の人と話すとののは5分内至10分が適当であろう。適当な時間に上手に話しを打ち切る。これは一般に日本人が不得手とするところで、とかく、一人の人を独占して長々と話してしまうことがある。特に相手が有名人である場合、その人を一人占めにするのは避けるべきである。もしそこへ他の人も来たらその人を上手に話に加わってもらうようにする工夫が必要である。

一般のレストランにおいても考慮すべき点はいくつかある。

オ. 適当なレストランを選択するのは難しいことである。しかし、我が国での基準をそのまま参考にして決めればよい。つまり、若い人達が気軽に入れる店、数人で何かの機会に行くようなややあらたまった店、などである。

カ. 入口で待ち、座席の選択をウェーター、ウェイトレスに任せるレストランが我が国でも一般的になりつつある。しかし、気軽に入れるような店では、自分で座席を選択するのは外国でも同様である。その際こちらの人数に合った座席をを選択すべきであるのは我が国も欧米も同じであって、こちらが一人、または二人であるのに、6人用、8人用のテーブルに座るのは

檉 本 英 彦

常識のない行為である。これらのテーブルはその人数のグループの客のためにそのレストランが用意しているものである。

キ． たまたま手元に持っていた食べ物を、レストランの中で食べてはならない。持ち込みの食物をレストランで食べることは我が国でもしない行為であろう。しかし外国へ行くと、何でも許されている、という気分になったり、状況の相対性の認識がなくなってしまうことがある。持ち込み食を食べることはレストランの営業権を犯すことである、という認識を改めて持ちたい。

醤油など我が国の調味料を取り出して、その店で注文した食べ物にかけるのも、上記のことに準じていて、その食事が口に合わないといっているようなものである。

ク． 食事の際に写真を撮り合う、特に立ったり、場所を替えたりして写真を撮り合うこともあまり勧められる行為ではない。

ケ． レストランが混んでいる場合、食事が済んだらできるだけ早く席を立つべきである。

コ． 鞆などはテーブルの上に置かないようにしたい。これらは地面に置かれることもあり、食事をするテーブルの上に置くべきものではない。(商店でカウンターの上に鞆を載せるのもあまり勧められない行為である)

サ． 女性が食事のテーブルで化粧をすることは、教養のない行為と見なされるであろう。化粧はトイレでするのが常識であろう。

9. 喫煙と飲酒について

成人、この場合は成人した学生にとって、喫煙は個人的な行為であって、全く自由である。しかし煙草を好まない人に自分の吸う煙草の煙を吸わせるのは、他の自由への侵害となるであろう。現在欧米の多くの国ではこの考えが徹底していて、喫煙が制限されている場所がかなりあるという事実を知っている必要がある。

また、喫煙は癌などの病気の誘因となることが知られているので、煙草の広告は各種の制限を受けている。これらの国では、喫煙は今ではやや時代遅れの習慣と見なされていることを事前に知り、また煙草が広告宣伝され、街頭の自動販売機で売られているかどうか、などを観察するのも社会学習の一部となるであろう。アルコール飲料に関しても、同様の観察をしたいものである

テレビなどでビールを大きなジョッキで一気に飲むシーンが放映されることがあって、若い人にはビールはこのように大ジョッキで一気に飲むものだという考えを持っている人が多い。このために健康を害することがある。将来のためにも、外国の人のビールの飲み方を観察するのもよいであろう。

10. ショッピングについて

ア． 帰国の日本人を満載した旅客機は、他国の旅行者を乗せた飛行機より重く、パイロット

はそのことを考慮に入れて操縦桿を握るのだという。我が国が輸出が輸入を上回り、貿易収支が黒字であるということから、一種の輸入である外国での買物はむしろ奨励されている。さらに為替相場の関係と相まって、日本人の海外での買物は非常に盛んである。

欧米は豊かだという明治以来の先入観や、旅に対する不安からか、外国旅行には必要以上のお金を持参する人が多い。また何かがあるか分からないが、何か良い物があったら買おうという思いもあるかも知れない。

買物は決して悪いことではなく、また、どのような買物をするかということは全く自由なことである。しかし旅行先で、何をおいても商店へ、特に有名商店へ殺到しようとするのは賢明な旅行方ではないように思われる。欧米人は「観察し、経験する」ということを旅行の主眼に置ていることが多い。我が国でもこの様な目的で行動する人も多いけれども、一般的に、買物の比重がかなり大きいのではないだろうか。しかし、若い学生の場合には特に、個人行動の場合にも観察と、経験とを中心にしたものである。

イ. 出発前に、日々の費用、必要な買物、お土産の必要を考慮に入れて旅行中の経費について合理的に予算を立てて見ることを指導することが大切ではないだろうか。勿論旅行にはいわゆる「買い物の楽しみ」の分野があっても当然であろうが、学生としての限度を考えないといけない。

また、妥当な額の予備費も必要であることはもちろんである。したがってトラベラーズチェックは全部を使用しなくても、保存しておれば、一生使用できる保証がある。また帰国後日本円に換金することもできる。

ウ. 欧米のいわゆるブランド商品は、中年以上のかかなり生活の余裕を得た人達が用いるもので、それらを売る店は、年配の一部の限られた人達しか行かないものだと言われている。そして、我が国の若い女性たちが大勢、それらの品物を売る店につめかけて、高価な品物を一人で何点も買うということが現地の人達には、驚きを持って見られているのだとのことである。

どのような店でどのような買物をするか、ということは全く個人の自由である。しかし、国内ではこれらの若い人達も決して2、3人で、高級料亭で食事をするのではないと思われるが、これはどのような店が自分にはふさわしいか、ということを知っているからである。

エ. 欧米では、買い物に当っては、まず計画を立てる。そして買物を予定した品物を紙切れ(Shopping list)書いて買い物に出かけるのが普通である。欧米のスーパーマーケットその他の商店へ行くと、よく紙切れを見ながら買い物している人を見かけることがある。また、ショーウィンドーを眺めたりして、店に入る前にはすでに買い物の決心ができて多い。

また、買う品物に関してはすでに自分の意思や、希望が決定されているので、それを店員に言えば、店員は喜んで選択のために商品を見せ、助力をしてくれるであろう。この際もし希望の品物がなければ、そのまま店を出ても、何ら不快に思われることはないであろう。我が国に

梶 本 英 彦

おいても賢明な買い物はこのようにして行われると思われる。

もし、それが有名店であるとの理由で、単なる好奇心から、なんら買物の具体的な目安もないのに、2、3人でそこに入り、漫然と品物をいじりながら見てそのまま出て行く、というのは我が国でも歓迎されないやり方である。

オ. 欧米では例え親が裕福であっても、社会に出ていない、または社会に出て間もない若者は、お金をあまり持っていない、というのが通念であるということをよく事前に知って置くことが良いと思われる。従って、若者は質素であるのは当然であると思われ、まして多くの高額な買い物をするのはやや奇異の目をもって見られるであろう。

カ. 欧米では「客は王様である」という考え方はないようである。店の品物はその店主に属し、彼が管理しているものである。従って多くの品物は、店員に依頼して見せてもらうシステムになっている場合が多い。万博に出展して日本人を相手にした外国人が一様に印象を持ったことは日本人が展示や販売用の品物を手に取って見たがる、ということであったと言われている。これが外国の商店においても、外国人からは、際立った行動様式と見なされていると思われる。

キ. 多くの店舗では私服のガードマンが監視や警備に当たっているのが普通である。東洋の諺に「李下に冠を正さず」というのがあるが、疑惑を招くような行動は意識して避けるべきである。

ク. 品物を購入する意思を店員に伝え、その代金を支払って初めて、客はその品物の所有権を獲得するのである。この様な考え方は我が国ではやや堅い、理屈っぽい考えと見なされるであろう。しかし、合理的で、個人主義的で、契約関係を重視する欧米においてはこの事実は銘記して置く必要がある。この様な考え方に基づいて行動すればその人は良き客として歓迎されるであろう。

ケ. 欧米では店員は原則として一度に一人の人しか対応しない。また店員は店に入ってきた客の順序を覚えていて、その順にサービスするであろう。もし店員がその順序を間違えると、客自身が「こちらの方が先です」などと店員に注意するのが普通である。

従って、先客を無視して、サービス中の店員に話しかけないようにしたい。黙って待っていればやがて順番に従って対応してくれるであろう。

コ. 一人があるものを買うと、他の人も連鎖的にそれを買うというのも、日本人の行動様式の一つに挙げられている。旅行での買い物は、出発前にあらかじめ予定を立てておくことが賢明である。予定の買い物、予定外の買い物、お土産を買ってあげる人達のリスト、これらを計画的に考えて置くことが、必要以上の買い物熱に陥らないためにも有効であろう。

また、友人や知人から買物の依頼を受けた場合は、確約を避けることが賢明である。限られたスケジュールの中でそれを売る商店を見つけることは困難なことがあり、自分の時間、閉店時間、品切れの可能性などを考慮にいれないといけない。「もし可能なら」という前提でしか買物の依頼を受けるべきではない。

サ. 品物を外国から輸入すればそれに対して関税がかけられる。海外で品物を買ひ、それを日本に持ち帰ることは一種の輸入の行為である。しかし旅行者に対しては、一定の限度の買い物に対して免税の特典があることはよく知られている通りである。

買った品物を自分で郵送したり、店に郵送させる場合には、宛名を自分にしなければならない。これは不自然だと言って、もし受取人を自分の父親にしたとすると、その品物は贈与と見なされ、旅行者としての特権を適用されないこととなる。

シ. 郵送には、航空便と、船便があるが、後者は英語では Surface mail と呼ばれるのが普通である。周囲を海で囲まれた我が国と違い、地上の輸送は、船とは限らないからである。また多くの国では、Air mail の一種に、料金のやや安い Economy Air とされるものがある

また、書籍やパンフレットなどの印刷物で、手紙を含まないものは、Printed matter として扱われる様にならないといけない。

郵送方法でも必要以上に無駄で高価なやり方をしないようにしたいが、筆者はアメリカで我が国の若い女性が多く品の詰めた大きな箱を数箇、現地の大人でもしないような高価な航空便で送り、郵便局員が驚いているのを目撃したことがある。

11. 家庭滞在について

ア. かなりの研修旅行においては家庭滞在が組み込まれていることが多い。自室にこもりきりになることを避け、しかるべき時間は家族の集まる部屋で時を過ごすことが大切であることは何よりも良く留意されていることである。

イ. 我が国では、客に対しては至れりつくせり、という感じで世話をするのが普通である。客の意向、願いを先読みして、言わば、先回りの世話をするというのが一般である。しかし、欧米では、基本的なことを指示される以外、こちらが特に申し出ない限り「ほって置かれる」という感じになることがある。

「自分の意思は自分で決定する。そして、その意思を他人は尊重する」という考えからであって、その客をないがしろにしているのではない。こちらが申し出れば親切な助力が与えられるであろうということを良く知っていないと円滑な人間関係が得られないかも知れない。

ウ. やや長期の滞在である場合はその家の鍵を渡され、その家に自由に出入りして良いと言われることがある。しかし帰宅時間はその都度家の人に伝えておくべきであろう。

エ. 夕食をその家で当日食べるかどうかは家人にとっては大きな問題であるから、もし外食するような場合は、あらかじめ伝えておくべきである。もし外出後でないと、夕食の予定が分からない場合は「～時でないと、夕食の予定が分からない。～時に分かり次第電話する」と言った心遣いが必要である。

オ. 友人をその家に連れてくる場合は、あらかじめ家人の了解を得ておくべきであろう。

カ. 西洋式浴槽での入浴法はかなり知られていることである。しかし、家庭に滞在してみると浴室にカーペットが敷きつめられていて、浴槽の部分にまで敷かれている場合があつて驚く

檉 本 英 彦

ことがある。カーテンを浴槽の内部に入れ水が外にこぼれない様にする理由が理解される。

日本人が外国の家庭に滞在する場合、最も問題を起こしやすいのは、入浴に関してであるとされている。我が国の若い女性にその入浴時間を尋ねると、多くの場合30分ないし、40分、時に1時間という答えが返って来る。また多量のお湯を使うのが普通である。

「日本人は安全と水はただであると思っている」という有名な言葉がある。諸外国では降雨量は我が国の数分の一であることが多く、水は一種の貴重品である。(我が国でも人口の増加などの影響で、近年この傾向がないとは言えない) また、欧米の家庭では、温水は貯湯式であることが多く、浴室で多量のお湯が消費されると、他の場所への供給、次の人の入浴にさしつかえることがあり、家庭滞在の際のトラブルの原因となる可能性がある。

浴槽には一回だけ湯をはり、湯を入れ替えることはしない。上がり湯はシャワーですませる。こう言った欧米での常識を知っておくことが大切である。

また、欧米の浴室 (Bathroom) はトイレと同室であるので、長時間の独占は家人に迷惑を及ぼす可能性がある。また、浴室は多くの場合二階にあって、寝室と隣あっていることが多い。入浴時に起こる音のことも考慮にいれないといけない。

なお、欧米人の入浴時間は10～15分、シャワーの場合は10分以下と考えて良いであろう。

キ. その家の電話の使用と通話料の件は、家人との取り決めに従わないといけない。特に日本などへの長距離電話の使用は、はっきりとした約束を交わしそれに従う必要がある。時として最初一回の長距離電話は、Present としてかけさせてもらえることはあるが、それ以降の長距離通話に関しては、相互の取り決めに従わないといけない。

家庭の電話でも公共の電話でも5分以上の使用は他に迷惑がかかる可能性がある。こちらから使用する人は自分以外に居なくても、外部からその家へ通話しようとしている人が困っているかも知れない可能性を考える必要がある。

ク. ホテルではジャムなどが個人の容器に入っていることが多い。家庭においては、共通の容器から、ということが多いのは我が国でも同じである。ジャムなどはその容器から直接自分のパンに取るのではなく、一旦必要量を自分の皿の上にとり、そこから自分のパンにのせる。

ケ. 食べ物や飲み物に関して自分が禁じられているもの、どうしても嫌いなものは事前に知らせておくことが大切である。遠慮してこれを伝えず、その食べ物が出された時点で断るのは不快な出来事となろう。

コ. カップや皿を裏返してその製造元を見るのは、我が国ではむしろその容器を賞賛していることと受け取られるであろう。これは茶道とも関係していると思われる。しかし欧米ではこの行為は失礼だと思われるという。ちょうど他人の洋服の裏をひっくり返し、どこの生地、どこのテーラーかを見ようとするのに似ていると言われている。所変われば、品変わるということの良い例である。

サ. ある家庭へ入ると、その家族の構成、家人の内外の人間関係が何となく気になることがあるかも知れない。これはその家庭に何等かの事情があるからかも知れない。ある家庭に入っ

た場合、決してその家庭の事情について質問してはならない。しかしその家人が、自分で話題にする家族の事情は、当然こちらも話題にしてよく、また自分の家庭のこともできる限り話題にしたいものである。

12. 団体としての行動について、その他

国内においても団体としての行動には一定のルールがある。しかし外国においては特に厳重にこれを守らなければ、一人の人が見当たらないことはその団体の動きを止めてしまうばかりでなく、外国でこれが起こると、極端な場合には全体がパニック状態になることがある。

ア. ちょっとトイレに行くような場合でも、同僚、または引率者に知らせて行くことが大切である。その人の不在中にその団体が動きを始めなければならないことが起こるかも知れない。一人の人が見当たらないことは、全体に与える影響は大きく、特に心理的な影響が大である。

イ. 全体がバスを降りたが、一人だけ疲れていたで、そのままバスに残った。やがてみな戻って来るのだから、と思ってその人は居残ることを誰にも伝えなかった。その団体が、やがて集合し人員を調べたところ一人が足りず大騒ぎとなった。このような事例も大きな教訓となるであろう。

ウ. もし仲間、または全体とはぐれたら、はぐれたことに気が付いた場所に留まっていることが大切である。ある人がいないことに気が付けば、それを探す人は必ず元の道に戻ってくるのが普通だからである。

エ. ある人が居ないことが分かり、捜しに行かなければならない時は、誰がどこへ捜しに行くかということは、引率者の指示に従わなければならない。各自が気をきかし思い思いに出かけると、捜しに行った人をまた捜しに行かなければならないようなことが起こり混乱が倍加するであろう。

オ. 近くに商店が見えると、団体を離れちょっと買い物、という衝動が起こりかねない。これも全体の動きを止め混乱させる原因になりかねない。買物は、選択に迷って時間がかかることがあるばかりではなく、レジでも列につかなければならないことがあり、予期以上の時間がかかることがある。

カ. 全体が集合している場合、それは道路上であったり、空港の中であったりする。長く伸びた列では中間の必要な場所に他の人の通过道を作っておくこと、歩道やホールは全部ふさがないように、お互いに注意しあわないといけない。

キ. 契約思想の行き渡っている欧米では、全体、または個人に対する指示や伝達が、一定の場所の掲示で知らされることが多い。直接、または放送などによる伝達でも、一回だけなされれば、個人はそれを了解したものと見なされるであろう。伝達や、掲示を見なかった、「言ってくれなかったから」という弁解は通用しないことを考えておく必要がある。個人は自己管理のできる大人として考えられている社会であることを知っていなければならない。

13. 写真の撮影について

旅行において欧米人が写真を撮る率を1とするならば、日本は6、7といった割合ではないかと思われる。特に有名な風景や記念物を背景にして何回も入れ替わって写真を撮りあっているありさまは大変特徴的である。

これは悪いことではないが、時として団体行動の時にも写真の撮り合いが始まって、団体の行動が阻害されることがある。

写真を撮ってはならない所、撮っても良いがフラッシュを用いてはならない所があるので、ある場所に行った場合先ずこの点を確認しないとイケない。他人の肖像権に留意し、断り無しに他の人に直接カメラを向けてはならない。

14. チップについて

ア. 外国旅行において日本人を悩ますことの一つにチップがある。しかし日本旅館での心付けや、我が国での一般の金銭の授受に比べると比較的単純で、小額である。しかも近年、旅行の大衆化に伴って、チップの習慣も変化して来ているように思われる。また若者の場合にはあまりチップは期待されないであろうし、間違いも許容されるであろう。

また団体行動の際は、個人がチップを配慮する必要はないのが普通である。しかし、個人で行動する場合もあり、欧米でのチップのことを一応知って置くことは有意義であろう。

イ. 現今チップが最も問題となるのは、タクシーと、食事の支払いの場合であるが、ある国では、そのような場合でもチップが不要なことがある。ともに10～15パーセントの額が期待されると考えて良い。また、食事の請求書に Service included と書れている場合には支払う必要はない。

ウ. 食事の際のチップの支払方法はいろいろである。料金をテーブルで担当者に支払う場合があるが、その際チップの分を含めて渡す。レジでの支払う場合には、同時に渡す、または横の皿の中に入れる。また、テーブルを立つ時にチップの額だけを見えないように皿の下などに置く、というやり方がある。

簡便なセルフサービス式のレストランが多く、自分が皿にとった食物に対して料金が定められる。このような場所ではチップは必要ではない。

エ. トイレにも30～100円程度のチップが必要な所がある。また、硬貨を入るとドアが開くトイレもある。このようなトイレは概して清潔で、安全である。

オ. 我が国でもお金は封筒に包む様に、欧米でもチップは他から見えないように渡すのが礼儀である。ポーターなどに立ったままチップを渡す場合は、握手するような形で手を下に伸ばして渡すのが普通で、上の方に捧げるようにして渡してはならない。テーブルの上では皿の下に隠すように置くのもこの理由からである。

カ. チップは元来上位の者が、その使用者などに与える性質の物で、現代の我が国における金銭授受とは意味や方向性がかならずしも同じではないことに注意する必要がある。

キ．警官、公共の乗り物の従業員、スチュワーデス、ホテルのスタッフなどにはチップを渡すことは失礼になる。その他単に「お世話になった」という理由で金銭を贈ることは欧米では行わない方がよい。

最 後 に

我が国では明治以来、欧米は先進国として模範にして来た。そのため欧米は生活程度が高く、従って贅沢である。特にアメリカ人は使い捨て文化で、贅沢である。という無意識の考えをわが国民は持つようになっていく。また欧米では全てが自由だ——といった考えがとかく前提を考慮に入れず、拡張して理解される傾向があるのではないかと思われる。

しかし事前に各種の有効なアドバイスを与え、諸外国の人々とその文化に対する理解を持っている場合には、現地での経験と相まって、実りのある学習ができ、彼らが自分が元々持っていたイメージとはかなり違った人たちであることに気が付き、自己の持っていた考えを修正し、より広い、人間理解、国際理解へと発展するであろう。

また、「自由な」社会においての人々の行動様式に接し、自分もその中の一員として存在し、行動したことは、彼等の、個人と社会との関係のより深い理解につながってゆくと思われる。

ある国が大国と言われるようになる時は、単に経済力の強大さだけではなく、政治、文化の面で世界の範となるものを持っていなければならない。しかし、その国の人々の考え方や行動が他国の人々の模範として賞賛されるものであることが何よりも大国としての条件である。我が国を訪れた人々で、日本人の礼儀正しさ、親切さを賞賛した人は多い。この賞賛を今後も確固としたものにして行くことも若い世代が引き継ぐ我が国の将来にとって何よりも大切なことであろう。